5　エルフ嫁(ドレイ）と商館主のえっちな午後の執務室♥

幕間の章　とある商館主の、とある一日

その１　朝の目覚めはすっきりと

商館主といっても、朝、のんびりぐーぐー寝ていられるわけでもないというのが実際の所だ。
実際、俺の朝は、そこそこ早い。
先に起きて、朝食の支度をだいたい済ませたエルフ嫁が、毎朝起こしに来るのだ。
……俺の下半身を。
「ん……」
股間のもぞもぞとした感触で、目覚める。
さわさわと俺の分身をまさぐる、柔らかな手。
……またか。
そうは思うものの、可愛い嫁の手でさわさわされて、しかも。
「ぺろ……んっ、ちゅ……れろれろ……」
敏感な場所にキスしたり、ぺろぺろしたり。
そんな感じにされたら、やっぱりどうしても興奮してしまうというもの。
「あっ♪　すごい、もうこんなにがっちがちのビンビン。男の人のこれって、すごい……」
そう言って、すっかり勃起した俺の分身をまじまじと見つめているエミリア。
最近のエミリアは、毎朝、こうして俺のペニスの勃起具合を観察するのが日課だ。
「最近、いつも飽きずによく見てるなぁ……」
そう声をかけてみると。
「あ、おはよ、あなた♪　今日も元気ね」
そう返事をしつつも、視線はずっと俺の**それ**から離そうとしない。
「エミリア、俺のそんなのずっと眺めてて、楽しいのか？」
「うん、楽しいですよ？」
「楽しいのか……」
「だって……元気になると凶悪なくらい逞しさを感じるのに、ふにゃんってなると、なんか可愛いの……♪　ずっと見てても飽きないわ」
「そういうもんなんか……」
「まあ、あなたのだからってのが前提ですけどね。あ、またちょっとふにゃんってなってきちゃった」
すると、エミリアは再び手と口でさわさわ、ちゅっちゅ…と、萎みかけた分身を刺激する。

「おいおい、エミリアさんや。まあ、俺としちゃぁ、エミリアが喜ぶなら、多少は好きにしてくれて構わないんだが、あんまり焦らされすぎると、ちと辛くなる……」
「うん。だけど、もうちょっとくらいなら、いい？」
「ああ、もう1〜2回くらいにしといてくれると助かる」
「うん。じゃあ、もうちょっとだけ、観察させてね……。あ、また硬くなったぁ……♪」
再び力を取り戻した俺の分身を見て、うっとりと嬉しそうに笑うエミリア。
まあ、せっかく準備万端整ったのに、そのまま何もないと、下半身がムズムズしてきて少し辛いところはあるが、愛する嫁が喜んでるから、多少ならまあ、いいんだけど。
でも、そろそろ嫁のナカで、発射しないと、暴発しちまいそうになってきた……。
焦らされてると、先っぽがびりびりしてきて、こみ上げてくる射精感をガマンしきれなくなってくる……。
「あはっ♪　あなたのおちんちん、すっごいびくびくしてるわ……。焦らされてたから、辛くなっちゃったかな？」
じっとガマンしていても、俺の分身の反応で、何もかもお見通しだ。
つくづく、男って、分かり易すぎる。
「じゃあ、そろそろ私のナカ、入れてあげるわね」
そう言って、もう一度、俺の分身をさわさわちゅっちゅすると、少し姿みかかっていたそれは、たちまちさっきまでの勢いを取り戻す。
そして、エミリアは俺の腰の上で膝立ちになって、自分の女陰にそれをしっかりと宛がうと。
そのまま一気に腰を落とし、俺を迎え入れる。
キツくて熱く蕩けて纏わり付く、エミリアの胎内の感触に、反射的に下半身がびくんと反応してしまう。
「んあっ…入るなりナカで暴れちゃだめぇ……」
そうは言っているエミリアだけど、どことなく嬉しそう。
「しょうがない暴れん坊さんなんだからぁ……。そんなこらえ性のない旦那様は、こってり絞っちゃうんだから！」
そう言って、おなかをぎゅっと締めるエミリア。
「ううっ！　きついっ……！」

7　エルフ嫁(ドレイ）と商館主のえっちな午後の執務室♥

一瞬、ほんの少しだけ漏れたかもしれない感覚。
危うく果てるところだった。
そのまま、エミリアはリズミカルに腰を上下に揺らして、俺の精を搾り取りにかかる。
「あっ、あっ、あ、あっ、あぁっ、すごい、ナカで反り返って、おなかのこっち側、擦れてる……」
腰を弾ませ、俺のペニスを締め付けながら、微妙に前後左右に腰の位置を調整して、いちばん奥の、彼女の感じる場所に、俺の硬い先っぽが当たるように動くエミリア。
その衝撃は、エミリア本人にとって気持ちいいだけじゃなく、俺にとっても射精へと誘う呼び水にもなる。
「あぁ、ふあぁぁぁっ！　あなたのが、私のナカで、また、びくびくって……んあぁぁぁっ！」
エミリアの胎内の敏感なところに、俺のモノがまた激しくぶつかる。
その瞬間、エミリアの胎内が一際きつく締まり、たまらず俺も達してしまう。
「ダメだ……出るっ！」
びゅるっ！
びゅるるるるっ！

滾々と、愛する妻、エミリアの胎内に精をぶちまけて、彼女のナカから俺の色に染め上げていく。
「ああ……っ！　熱いのいっぱい、きたぁ……！」
エミリアもうっとりとした表情で、俺の精液の味を胎内で味わう。
彼女にとって、俺の精液の味はそれほどまでに甘美なものなのだ。
「あぁ……まだ、どくどく、おなかのナカに、注ぎ込まれてる……熱くて、おなかが溶けちゃいそう……」
胎内をすっかり俺に穢されて、うっとりと蕩けた笑みを浮かべるエミリア。
「あなたは……私のナカ、良かった？」
「ああ、最高だ」
「それなら、今日もすっきりお目覚めできますね」
「そうだな。毎朝が最高だよ」
「ふふふっ。私もです……。おはようございます、あなた」
そう言って、そっと、俺にくちづける。
ふわりと重なるくちびるの、何と甘いことか。
こんな毎朝で、気持ちよく起きれないことなどあり得るだろうか。

「おはよう、エミリア」
俺も身体を起こして、エミリアにキスのお返し。
「おはようございます♪　もう朝ごはんの準備もできてますから、顔を洗って、着替えて来てくださいね」
にっこり笑ってそう言うと、エミリアは手早く用意していた濡れタオルで、手早く行為の後始末をして、俺の分身を綺麗に拭いた後。
「じゃ、向こうで待ってますね♪」
そう言って、部屋から出て行った。
さて、それじゃあ、俺も着替えるとするか。
今日も清々しい、一日の始まりだ。

その2　奥様は、具合最高のスーパー秘書

朝食の後は、エミリアと一緒に執務室に出勤だ。
出勤とは言っても、生活スペースから隣の部屋へ移動するだけだが。
そして、朝イチからどっさり届いている書類の山との戦い……だったのは、少し前までのお話。
今では、その半分以上を、俺がやってたよりもむしろ効率的とも思えるくらい、エミリアが確認をして決済をしてくれる。
俺の所に回ってくる、俺の判断が必要な案件も、きっちりエミリアからの確認すべき点と、エミリアの意見が付箋で添えられているので、こっちも返答しやすく、仕事がスムーズに進むというもの。
「あなた。こっちの方、確認済みました」
「お、早いな」
「こちらが、確認をお願いしたい案件です」
「どれ……」
渡された案件の書類のいちばん上にあるのは、現場からの入荷要請のリストである。
これから春の季節に向けて、現場から仕入れるべき品目が上がってきているのだが、例えば支店ごとに結構意見が割れている……とかいうことが結構あって……。
これは毎回頭を悩ませる。
「こいつは毎回難題だな……」
「でしたら、明後日は経営会議がありますし、そちらで議題になさってはいかがでしょう？」
「まあ、それがいいだろうなぁ……」
エミリアの言葉に頷く俺。

9　エルフ嫁(ドレイ）と商館主のえっちな午後の執務室♥

その時、執務室のドアがノックされた。
「どうぞ」
俺の声に呼応して入ってきたのは、ばあやだ。
「旦那様、そろそろ、今日の入荷の検品が終わる頃になりますが……」
「ああ、もうそんな時間か……」
時計を見ると、確かにそんな時間帯。
毎回、入荷の受け入れがだいたい朝方からあるのだが、それが一通り済んだところで、最後に受け入れ状況の報告を兼ねて、必ず俺かエミリアが直接倉庫に出向いて現物を確認するのだ。
だいたい、普段はエミリアの仕事だ。
「じゃあ私、行ってきます！」
「ああ、頼む」
慌ただしくエミリアが部屋を出て行き、呼びに来たばあやも下がったところで、執務室には俺一人だけ残される。
さて……と。
エミリアから俺の判断を求められた書類に目を通して、必要な修正や決定事項を書き込んで、最後にサインを入れていく。
とはいっても、そんなに俺が口を挟むような案件の数も多くないので、先程の春の季節商戦ものに関する判断を除けば、ほどなく作業も終わりだ。
とりあえず今すぐに処理すべき案件を処理してしまうと、すっかり手持ち無沙汰だ。
しかも、今は執務室に一人きり。
……暇だ。
エミリアがやって来る、ほんの1ヶ月ちょっと前までは、毎日が目が回るほどの忙しさで、暇なんて感じる余裕なんかありはしなかった。
エミリアを戦時奴隷として買い取って以来、彼女はいち早く俺の秘書としての仕事を覚えてくれたこともあって、俺の仕事はだいぶ楽になった。
おまけに、ばあやが余計な気を回してくれたこともあって、なにやらトントン拍子にエミリアとの関係も進展し、彼女を嫁にもらうことになって。
正式な嫁入りはまだではあるけれど、今はプライベートはもちろん、この仕事部屋でも夫婦二人水入らず、一足早い新婚生活を満喫中だ。
そうしたら、今度は一人でいるのが落ち着かなくなってしまった。
変なもんだ。
今まで、側に誰かがいるという観念自体がなか

ったし、ましてや、嫁さんができるなんて想像も付かなかった。
それ以前に、女っ気が全くなかったからなぁ。
たった1ヶ月あまりで、この激変ぶり。
しかも、隣にエミリアがいないともう落ち着かない。
人生って、変わるときは本当に変わっちまうもんなんだなぁ……。
それにしても……今日は時間かかってるな。
何か問題でもあったのか？
俺が出ていった方がいいだろうか？
とはいえ、エミリアに任せた仕事だし、彼女から何か言ってくるまでは勝手に首を突っ込むのは良くないし……。
今度は心配でそわそわしてきてしまった。
意味も無く部屋の中をうろうろする俺。
何度部屋の中を往復しただろうか。
不意に、バタンとドアが開いて。
「ただいまもどりました！」
笑顔のエミリアが帰ってきた。
「エミリア、遅かったけど、何かあったのか？」
「いえ、今回納品元からいろいろ頂き物があって。それをあちこちに配っていたら、遅くなっちゃいました。ごめんなさい。それで……きゃっ」
エミリアの言葉が終わる前に、俺はなぜかエミリアに抱きついてしまっていた。
「もう……どうしたんですか？　急に抱きついてきたりして……」
「いや……なんでも……」
慌てて離れようとした俺だったが。
ぎゅっ。
それを引き留めるように、エミリアが俺を逆に抱きしめてきて。
「いいんですよ～♪　私はあなたの妻なんですから、好きなだけ甘えて下さい。ここでは二人きりなんですし」
エミリアはぎゅうっと俺の頭をかき抱く。
エミリアの柔らかなおっぱいに顔を埋めて、さっきまでの落ち着かない気分がすうっと溶かされて、洗い流されていくような感覚を覚える。
女の子のカラダって、ホント柔らかい……。
何もかもが溶かされてしまいそう。
この感触、マジ幸せすぎる……。
けど、余計なところまで元気になっちまうのが